



Title	Shakespeare 史劇における儀式的要素(Ⅱ)
Author(s)	藤田, 実
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 4, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Shakespeare 史劇における儀式的要素 (Ⅱ)

藤 田 実

Shakespeare の *Henry VIII* は、その第二幕第四場に、王妃 Katherine の裁判のため Blackfriars の広間へ国王以下、貴族や主教らの相当数の人物たちが正装して入場してくる場面を先ず見る。その場面のト書^①には、最初に登場する短い銀の職杖をもった二人の verger から、次につづく二人の scribe、カンタベリーの大主教、四人の主教、銀の権標をもった王室の守衛を従える宮内官、銀の pillar をもった二人の gentleman、それに cardinal、貴族及び国王と王妃と、その持物や、舞台の上に並ぶ位置について、かなり細かい指示が与えられている。そして、舞台の上には、国王を中心にして、それぞれの身分と役目にふさわしい衣服と飾りものに身をかためた各人物が居並び、この場の場面が形づくられるのである。

ここで注意してよいことは Shakespeare の時代の舞台の性質からも明らかのように、この相当数の人物が、はじめから舞台の上に国王を中心として然るべき場所に居並んで位置することは出来ないで、第二幕第三場の登場人物がすべて退場したあと、trumpet と cornet が吹奏されてから二人の verger が登場し、scribe が続き、更に archbishop や gentleman-usher たち、そして、貴族、国王、王妃、cardinal に至るまでが入場すると、それが全体として一つの行列を形づくっていたということである。つまり、この場で登場人物全員が出揃って舞台の左右に居並んでのち Wolsey が最初の台詞を発するまでに、次々に国王、貴族、高僧が、華かないでたちをして列をなしながら舞台に入場してくるのを観客が注目して見守っている暫くの時間があつたわけである。このいわば royal procession のように行列をなして入場するということが、幕というものをもたない当時の舞台の性質から止むをえない形であつたとしても、この行列の時間がこの劇の中でそれ自体の自立的な意味をもっていたということが、また一方において考えられるのである。つまり、観客にとってこの行

列の行われている時間が決して演劇的に空白の時間ではなかったわけである。このことは、当然同じ劇の第四幕第一場に見られる Anne Boleyn の戴冠の行列とも併せて考えられることなのである。この場面では、そのト書^②によると Westminster の通りを、大法官、ロンドン市長、ガーター勲爵士につづき、貴族たちがその位階に応じた金色の冠や華かな衣裳を身につけ、官職をしめす杖を手にして入場し、更に、支え持たれた canopy の下には髪を豊かに真珠で飾り、宝冠をつけ式服に身をかためた女王がつづく。その左右には二人の主教が付き従い、冠をつけた公爵夫人が女王の裳裾をささげ持ち、他の貴夫人たちが更にそのあとに付き従う。その行列は整然と秩序を保ち、人物たちは眩ゆい盛装に威儀を正して舞台の上を一巡して通りすぎてゆくのである。この部分のト書は、‘The Order of the Coronation’ として先の第二幕第四場のものより、更に長く、かつ詳細に 10 項目にわけてこの行列の細部を規定している。この行列は二人の gentleman が同じく舞台の上において、それを眺めて語りあうという形になっている。この二人の会話は、その内容からみて、専らこの行列の内容や細部を観客に解説するような役割をもっていると考えられるのである。それは、観客の好奇の目がこの行列につよく注がれていて、この劇中の単なる一事件という平面においてではなく、行列それ自体がこの劇の進行している action と切りはなしても、なお観客の心を誘うに充分なものを備えていたことを示すのである。

この第四幕第一場の行列を舞台の上で目撃する gentleman のうちの一人が、この行列をさして、“A royal train, believe me” と云う。このことばは、舞台の上で演じられているこの行列の印象を、まずその点に固定しようとして述べられたと考えられる。NED は、此の箇所をその用例の一つにあげて、その ‘royal’ の意味を ‘finely arrayed ; resplendent ; grand or imposing’ と定義しているが、この行列が眩ゆい色彩と光と荘重さを舞台の上に視覚化しようとしたものであることは、第二幕第四場の入場の行列と同様なのである。それは先ず観客の好奇の目をすいよせる spectacle としてあった。例えば、そのト書の第六項には、‘*Marquess Dorset, bearing a sceptre of gold, on his head a demi-coronal of gold. With him, the Earl of Surrey, bearing the rod of silver with the dove, crowned with an earl’s coronet.*’ と指定されている

ように貴族たちの持つ職杖や冠は金や銀の細工でなっているものであり、この国王と王妃、貴族とその夫人、高官たちの金や銀や宝石や真珠で飾られた宮廷風俗の目もあやな色彩と輝きの中に、観客たちはある眩ゆきの極点的なものを見ているのである。

色彩や光のもつ視覚的な輝きは、すでに文学の表現ともつよく結びついていて、その表現が喚起する光と色のイメージは詩の与えうる豊富さの一部を形づくっていた。Chaucer にあらわれる雄々しい勇者は、

The grete Emetreus, the kyng of Inde,
Upon a steede bay trapped in steel,
Covered in clooth of gold, dyapred weel,
Cam ridynge lyk the god of armes, Mars.
His cote-armure was of clooth of Tars
Couched with perles white and rounde and grete;
His sadel was of brend gold newe ybete;
A mantelet upon his shulder hangynge,
Bret-ful of rubyes rede as fyr sparklynge;
His crispe heer lyk ryng was yronne,
And that was yelow, and glytered as the sonne.

(*The Knight's Tale*, 2156—2166)

と描かれ、また Spenser では、この上ない豪華な宮殿は次のように表現された。

But for to tell the sumptuous aray
Of that great chamber, should be labour lost;
For living wit, I weene, cannot display
The royall riches and exceeding cost,
Of euery pillour and of euery post;
Which all of purest bullion framed were,
And with great pearles and pretious stones embost,
That the bright glister of their beames cleare
Did sparkle forth great light, and glorions did appeare.

(*The Faerie Queene*, III. i. 32)

Holinshed の *Chronicles* も表現的にはこの流れの上であって、先の *Henry VIII* 第四幕第一場の行列の詳細なト書も概ね Holinshed に従ってつくられたものである。黄金と宝石と色彩的な衣裳のつくり出す眩ゆきは、人々の内部に深く根を張った嗜欲のその対象なのであった。その眩ゆきのイメージは容易に彼らを現実を超えた世界へと誘うことが出来た。すでに見た *Henry VIII* の二つの行列が、単なる豪華な宮廷風俗への興味より進んで、更に人間の内奥にふれかける眩ゆい光輝と結びつこうとするのであって、演劇は、そのすぐれた機能の一つとしてこの種の眩ゆさに人々を導きゆくことが出来たのであった。

この種のきらびやかさの描写は、すでに同じ劇の第一幕第一場で、Norfolk が Andren の谷で英国王がフランス王と相会した有様を伝える様子にあらわれている。

Then you lost

The view of earthly glory; men might say,
Till this time pomp was single, but now married
To one above itself. Each following day
Became the next day's master, till the last
Made former wonders its. To-day the French,
All clinquant, all in gold, like heathen gods,
Shone down the English; and to-morrow they
Made Britain India: every man that stood
Showed like a mine. Their dwarfish pages were
As cherubins, all gilt; the madams too,
Not used to toil, did almost sweat to bear
The pride upon them, that their very labour
Was to them as a painting.

(*H8*. I. i. 13—26)

‘clinquant’ は金や銀の光を伝え、また光に当たった鎧の輝きをおもわせる。‘heathen gods’ は土や木や石で出来ているものであるが、その上には金の薄い箔がはってあるものであった。‘India’ もまた金への連想のつよい語であった。‘mine’ は gold の意味での初例は NED では 1627 年

ではあるが、ここでは当然、金への連想を伴う。そこには、飽くことのない金色の光の喚起があり、また化粧による色どりのように ‘pages’ も ‘madams’ も頬を紅潮させ、色彩が強調される。Norfolk によるこのような形での ‘glory’ の表現は、明らかに軽薄へと向うものがあって、それを聞く Buckingham は、それは余りの誇張とたしなめる。が、Norfolk は、自分は卑しからざる身分で、名誉にかけてうそいつわりは申さない、いくら上手な語り手であってもその実際の有様の生々したところは伝えきれものではないと言い、万事は見事に行われたのであって、*“All was royal”* (*H8*. I. i. 42) と嘆息するのである。出来事の表現のあらゆる空しさをくぐって、なお、彼は、王のみが体现しうる華麗の眩ゆい質のものを ‘royal’ ということばで指し示そうとするのである。そして、この地上において可能な限りの金色のきらびやかな光が、本質的に王のものに属し、その眩ゆい光輝が ‘royal’ という表現をえているところにこの歴史劇の特質が示されているといつてよいのである。またこの同じ形容詞は、第四幕第一場において、先に述べた以外に更に二度繰返し用いられていることは注目されてよい。即ち、この場の行列が通りすぎたあと、更にもう一人の gentleman が登場し、自分が見て来た Anne の戴冠式の模様を描写するように語る。

When by the Archbishop of Canterbury
 She had all the royal makings of a queen,
 As holy oil, Edward Confessor's crown,
 The rod, and bird of peace, and all such emblems
 Laid nobly on her;

(*H8*. IV. i. 86—90)

これも Holinshed に充分基礎をおいた部分なのであるが、その *Chronicles* においては用いられていない ‘royal’ という epithet がやはり注意をひくのであって、‘royal makings of a queen’ が、queen の地位に附属する品々であると同時に、それらが、尋常でない高貴な質の容易に触れえない尊厳をたたえたものであることをも示そうとしている。また、それより先、行列を舞台の上で待ちうけている二人の gentleman のうちの一人が、

The citizens,
 I am sure, have shown at full their royal minds —
 As, let 'em have their rights, they are ever forward —
 In celebration of this day with shows,
 Pageants, and sights of honour.

(H8. IV.i. 7—11)

と、coronation を祝う市民の熱意をのべている。その 'royal' は、国王に対する彼らの好意と親愛の気持を意味するものであるが、'shows/ Pageants, and sights of honour' といった催しによってその coronation を祝うのは、いわば彼らの側で royalty を言祝ぐということなのであり、また royal なものへ接近しようということなのである。これらの表現においては、いづれも、この劇が含んでいる王侯の世界の眩ゆいきらびやかさが何らかのつながりをもっていると考えられるのである。

Anne Boleyn の行列を待つこの gentleman が、'shows, / Pageants, and sights of honour' を、この劇において 'royal' ということが示す色彩と光の眩い世界と結びつけるのは、当時にとっては充分根拠のあるものであった。pageant は、本来中世の Mystery Play の上演に用いられた車つきの移動舞台であったが、Tudor 朝では、国王の巡幸に際して、それを迎えるために催される舞台仕立ての野外での演芸や、劇的場面をつくってみせる見せ物を指すようになっていた。国王の巡幸は、すでにこの劇の戴冠の行列においてもうかがわれる通り、人々の間に大きな出来事としての意味をもっていたのであり、巡幸の行列自体がきらびやかなまつりとしてあったのである。1432年にHenry 六世がパリで戴冠してロンドンへ入った時に仕立てられた pageant は6ヶ所であったが、その第2の pageant はロンドン橋の drawbridge の中に舞台があり、ビロード、絹、金布、それにつづれ織りの垂れ幕で飾られ、舞台上には、Nature, Grace, Fortune の三人の Empress がおり、その左右には7人ずつの乙女が侍していた。そしてそれは一つの moral allegory をあらわすように仕組まれていたのである。pageantry はそういった allegory の人物の言葉とか動きそのものでなく、舞台上に静止してつくられる視覚への appeal にその特徴があり、舞台の美しさによって、先ず視覚をよろこばすことによって教育的な効果を与えるものであり、工夫

と注意が充分にそこにとらされていたのであった。^④1604年の James 一世の entry においても、その催された pageant の目的は、その華麗な show によって国王と観衆をよろこばせることにあり、またその show の中で具体化された moral を彼らに教えることにあった。つまりその主題をあらわすのに、visual appeal と symbolic significance とが結びつけられていた。^⑤pageant の舞台の視覚的な色どりと輝きは非常なもので、この James 一世の entry で pageant の舞台をつくった Ben Jonson は “The walls and gates of this Temple were brasse; the Pillars silver, their *Capitals* and Bases gold”^⑥ とのべ、また、pageant を形容して ‘gorgeous, gaudy, gilded, painted, pompous, glorious, triumphant’ という言葉が用いられたのであった。^⑦中世の pageant stage は中世の教会の内部の色彩と同じように豊富な色どりをもっていたといわれ、また heraldic device においても同様であった。そのように色彩に重点がおかれてはいても、各々の色彩のもつ象徴性については厳密な約束があって、自由な空想が入りこむ余地はなかった。^⑧pageantry は allgory を主に取扱って不可視な観念の主題を可視のものに表現したのであるが、その視覚上の表現のために、そこに用いられた衣裳も当然その spectacle の重要な部分をなすものであり、その衣裳の地質の豪華さや鮮かな色彩は観客の目を喜ばせるものであった。pageantry の王も王冠をかぶり、orb や sceptre をもち、crimson-purple の衣をまとっていたし、他の登場人物たちも観客に容易に見分けがつくよう特有の持ちものを持たせられ、またその衣裳の色には伝統的な colour symbolism がひきつがれていた。Virtue は白、Envy は黒、Fame は淡青の衣をつけていた。Vigilance は黄色の衣をつけ黄色のマントを羽織り、開いた眼玉と銀の縁どりがそこにつけてあった。Gladness は緑の衣を着け、多様な花の刺繍のついた色彩の豊富なマントをつけていた。^⑨宗教改革以前にはカトリックの聖職者が礼拝や儀式にまとう法服が、そのまま Miracle Play にもその衣裳として用いられたのであったが、宗教改革によって政府は教会儀式を簡素化し、またそれを英国風なものへと変え、そのために任命された委員たちは聖職者の祭服を売却したり贈与したりして処分し、俳優たちもこれを受取ってその恩恵をうけたのであった。16世紀から17世紀にうつ

りかわる頃には、エリザベス朝の doublet や cloak や、またローマ風の かぶとやよろいの脛あてが、カトリック聖職者の biretta や cope や alb に舞台の上でとってかわるようになるのであるが、新しい服装も依然としてそれらのもつ豪華さは受けついでいて、その前身が何であるかを物語るものであった。このように pageant の舞台と俳優の衣裳は guild の組織と費用を土台にして、また、エリザベス朝やジェームズ朝の正規の劇場の職業的劇作家の力をえて、ぜいたくで華かな spectacle をつくり出すことが出来たのであった。かくして、pageantry の舞台が構成する allegory は、専ら豪華な色彩と光とで構成された tableau として表現されており、豊富な視覚性がその舞台の本質をなしていたのであって、先の第四幕第一場に登場する gentleman が ‘shows, / Pageants, and sights of honour’ という言葉を口にするのは、彼等の内部に、この視覚的な演劇への深い傾斜があつてのことであると理解されるのである。彼等にとって pageant の舞台のもつ金色の光と華麗な色彩の輝きはつよい魅惑であった。また、その光と色彩は言葉を経ずしてそのまま彼等の中で allegory と化することが出来たし、そういった可視的な光や色彩は、彼等の中で不可視なるものへと interpret されて、彼等の心に深く訴えることが出来た。中世的な考え方からは、美の観念はつねに完全さ、釣り合い、光輝といった概念に帰するのであるが、特に光と輝きが重視され、純粋な色あいのものは美しいとされた。光の反射によってつくられる一種の天使的世界の輝きがよろこばれ、崇高と永遠の感情を生み出した。可視的な光と色彩のイメージは、それを媒体として人を不可視なるものの認識に導くものであった。一見して我々には陳腐な、或る場合には無意味な装飾としか映らないものではあっても、その平面的な装飾の構成は彼等の内部の構造に対応し、彼等の精神の index となりうるのである。エリザベス朝では、宗教的な色彩の舞台は抑えられるようになり、それに対する検閲は強化されてはいたが、演劇にはなお、中世の Morality Play, Miracle Play, Saint Play からひきつがれた教化的な機能は存続しており、また題材への検閲はあったが伝統的にカトリックの儀式と結びつけられて考えられる演出法を抑えたり、またこの儀式のもつ魅力への欲求を改革することとはなかったといわれる^⑧。エリザベス朝の演劇はなおそういったものを土壌の一部にして成立しているものであり、Shakespeare の史劇においても、

こういった人々の精神の在り方との結びつきが十分に考えられるのである。

Henry VIII の二つの行列の詳細なト書の記述は、Holinshed に基いているものであるが、その *Chronicles* の叙述がこのような行列の細部の衣服や持物にまで亘ってなされていることは、たとえ平面的な羅列ではあってもその detail が読者のうちに、光と色彩にみちたイメージを喚起し、それが彼等到一个の pleasure をもたらすものであったことが考えられるのである。それは単に歴史への興味をつなぐ断片に止らないで、実は読者にとっては王侯の行列のもつ豪華な装飾に富んだ光と色彩は、その視覚的なイメージによって、その歴史の核心そのものを深く彼等に手渡す重要な detail であったのである。これらの source に含まれる歴史の philosophy は、Shakespeare の史劇を全体として成立させているとともに、これらの source に反映している人々のものの感じ方も、また、Shakespeare の史劇を深く人間の内部に根拠づけていたことが考えられるのである。Holinshed の *Chronicles* のこれらの行列のたゆみない細部の叙述の、いわば英国の royalty が包含する豊富な細部の中に、人々の日常性が接近しえないある眩ゆい世界の存在を指し示してみせるのである。その意味から、人々の中においては、royalty は政治的な、社会的なものからもう少しそれたところに更に一つの意味をもっていたのではないかと考えられるのである。royalty は人々の中においてある眩ゆきの根源としてあり、その眩ゆきは一つの真を彼等の中に形づくっていた。それは、いわば文学と美術の中で問題となる性質の詩的な真としての眩ゆきなのであった。中世の時代は、美を芸術の領域で考えるよりも、真理の領域で考えたのであり、目もあやな色彩や光があたえる感覚への pleasure は、即ち、彼等の中の至高にふれることにつながっていた。Shakespeare の史劇においてその王に附与されるはなやかで荘重な色彩と光は、基本的には文学の領域において考えられるこの眩ゆきに関係しているものであり、*Henry VIII* において、二人の gentleman が目撃した行列も、また Buckingham が伝えようとした英国王とフランス王との遭遇も、その華麗な輝きが 'royal' と表現されるとき、人々の中にいだかれたある極点的な眩ゆきの世界が、royalty という形をとってあらわされているのだと考えられるのである。

(つづく)

1. *Henry VIII*, II. iv. S. D.
2. *Ibid.*, IV. i. 36. S. D.
3. Glynne Wickham, *Early English Stages 1300 to 1660, Volume One 1300 to 1576*, Routledge and Kegan Paul, 1959, pp. 76—7
4. *Ibid.*, p. 82.
5. Alice V. Griffin, *Pageantry on the Shakespearean Stage*, College and University Press, 1951, p. 100.
6. Quoted in Wickham, *op. cit.*, p. 101.
7. Leslie Hotson, *Shakespeare's Wooden O*, Rupert Hart-Davis, 1959, p. 60,
8. Glynne Wickham, *Early English Stages 1300 to 1660, Volume Two 1576 to 1660, Part I*, Routledge and Kegan Paul, 1963, p. 227.
9. *Early English Stages, Volume One*, p. 107.
10. *Early English Stages, Volume Two*, pp. 37—8.
11. *Ibid.*, p. 37.
12. E. M. W. Tillyard, *Essays Literary and Educational*, Chatto & Windus, 1962, p. 48.